

その愛の名は、  
仁義なき溺情

## 目次

### その愛の名は、仁義なき溺情

#### プロローグ

第一章 再会は突然に

第二章 逃のがれられない唇

第三章 自称紳士の教育

第四章 吹き荒れる恋心

第五章 絡み合う恋情

第六章 その愛の名は、仁義なき溺情

#### エピローグ

番外編 もうひとつの仁義なき溺情

5

6

10

62

99

133

189

226

273

279

その愛の名は、  
仁義なき溺情

## プロローグ

東京下町の一角。昔ながらの商店街の裏手に、その小さな公園はあった。

遊具はなく、錆びたベンチがひとつ置かれているだけの、閑散とした場所である。

初夏のぎらつく太陽が傾いた頃、その公園に、背広を着た恰幅のいい男性が現れた。

厳めしい面持ちの初老の男で、手には赤い薔薇の花束がある。

男はベンチに座って大きな身体を丸めると、頭を垂らしてため息をついた。三十分あまり嘆息を繰り返した後、おもむろに歩き出し、公園の脇に停めてある黒塗りの車に乗って去っていく。

それが、ここ一ヶ月における男の日課だった。

その様子を同じベンチの端から見ているのは、赤いランドセルを背負う十歳の少女——北村藍。

商店街が見渡せるこの場所で、熱々のたこ焼きを食べることに幸せを感じていた藍にとって、毎日黄昏に現れるこの辛くさい男の存在は、たこ焼きの美味しさを半減させる。

藍はこの悩みの種をなんとかするため、男になにかあったのか尋ねてみた。

「実は、おじさんには好きな女性がいてな……」

ぼつりぼつりと語り出した男曰く、彼には意中の女性がいるようで、彼女に求婚したいが、その

勇気が出ないらしい。毎日花束を買っても渡すことができず、ここでずっと煩悶しているのだとか。

「完全におじさんのひと目惚れでな。毎日通った甲斐あって、それなりにいい雰囲気になったんだが、プライベートでは会ってくれないんだ。シングルマザーだからと、遠回しに客と店員以上の関係にならないよう一線を引いてくる。子供がなんだというんだ。おじさんは真剣なんだ。だからいつそのこと、子供ごと彼女をもらい受けようと求婚することにした。だが、もし断られたらと思うと、こう……勇気が出なくなってしまうてな」

男は肩を落としながら続ける。

「それに子供の意志も無視はできん。彼女は子供のことを詳しく言いたがらない。許可されていないのに勝手に調べて、子供に接触するわけにもいかんだろう？ ……なあ嬢ちゃん。子供の立場からすると、新しい父親が突然できるのはいやか？ 母親の結婚の後押しはしにくいものか？ ここに私の欄を埋めた婚姻届も用意しているんだが、どうすれば子供にも祝福されて、彼女にサインしてもらえと思う？」

藍は話を聞いてイライラしていた。小学生の自分よりはるかに大人のくせして、自ら動いてもみないで、なぜ憶測だけでグジグジと悩んでいるのだろう。

懐から出したその紙切れがなんなのかはわからないが、書いてもらいたいなら、書いてと言えればいいだけだ。花束だって受け取ってほしいなら、そう言って渡せばいい。家族になりたいのなら、彼女にも子供にもそう言えばいいだけだ。

遠くから眺めているだけでは結婚できるはずがないことくらい、子供だってわかる。

「ああ……どうすればいいんだ」

男は頭を抱えた。それを見た藍は自分の中で、なにかがぶちっと切れた音を聞いた。

彼女は呻くような低い声で言う。

「……おっちゃん。ぐだぐだ言わず、行け」

完全に頭にきていた。

こんな腰抜け男のせいで、至高のたこ焼きの味が損なわれるなど、たまったものじゃない。

勝手に尋ねてなんだが、男の恋愛事情なんて知ったことか。

大事なのは、たこ焼きだ。なんといつてもこのたこ焼きは、商店街にある人気店『たこちゅう』

で働く母が作っているもの。藍は学校帰りに母の仕事場に近いこの公園でたこ焼きを食べつつ、母の仕事が終わるのを待つのがこの上ない幸せなのだ。

「女はフヌケに用はない。自分について来いと言うくらいいの、男のカイショー見せてみる！」

それは最近見たドラマでの台詞だ。意味がよくわからないところはあつたが、背を向ける男を女が叱る場面だったから、たぶん使い方は間違っていないだろう。

藍は据わった目のまま続ける。

「父親になりたいなら、母親の幸せな顔を子供に見せてみる。悩む前に、まず動け！」

「——わかった」

その迫力に押されたのか、男はぐくりと唾を呑み込んで頷くと、その場から立ち去った。

たこ焼きの味を守った——正義のヒーローの如き満足感を得た藍が、満面の笑みでたこ焼きを食

べ始めて二十分後。去ったはずの男が戻ってきた。

「ありがどうな、嬢ちゃん。嬢ちゃんが背中を押してくれたおかげで、うまくいったよ。子供ごと必ず幸せにすると強気で求婚したら、彼女……泣いて喜んでくれたんだ。嬢ちゃんはおじさんの恩人だ。まさか嬢ちゃんが……」

藍は律儀な男の報告など聞いておらず、男の隣にはにかんで立つ女性を凝視していた。

『たこちゅう』と書かれた法被を着た女性。それはどう見ても——

「お母さん……？」

藍が呟いた途端、強面の黒服の男たちがわらわらと湧いて出てくる。

何ごとかとびつくりする藍の前で、彼らは左右一列に並び、泣きながら一斉に拍手をした。

「組長、ご成婚、おめでどうございます！」

……叶うなら、藍は二十分前の自分に言いたかった。

情けは自分のためならず。見知らぬ男に声をかけるな、と。

声をかければ最後、母の再婚を後押しした上、ヤクザの……しかも組長の娘になるよ——と。

## 第一章 再会は突然に

時は移り変わり、東京――

文教地区と呼ばれる静謐な地域に、五階建ての『アークロジック』本社ビルはあった。関東圏を中心とした都市再生整備をメインとする、老舗の総合コンサルタント企業である。八月上旬の早朝、『まちづくり推進プロジェクト』と札が掲げられた四階の会議室で、快活な女性の声が響いた。

「さあ、梅雨明けのじめつとした暑さに負けず、今日も元気に下っ端OLは、働きます！」

誰もいない室内で、雑巾を片手に高らかに宣言したのは――入社二年目、今年二十五歳になる北村藍である。

肩にかかる柔らかな黒髪。目鼻立ちが大きく整った顔。

意志の強そうな黒目がちの目が和らぐと、少しあどけない印象を周囲に与える。

藍はいつも始業の一時前には会社にいるが、ここ数日は特に出勤時間が早い。

理由は至極簡単。家のエアコンが故障し、扇風機だけでは暑さに耐えられなくなったからだ。

「あの蒸し風呂地獄に比べると、なんてここはパラダイス！ 冷風に当たれるのなら、いくらでも早く来てお掃除しちゃうわ。……あ、コピー用紙切れてる！ よかった、確認しておいて！」

たとえ社員といえども、冷房の恩恵をただで受ける性分ではない。経費がかかる分、きちんと労働力で支払っている。

始業四十分前。コーヒーメーカーにセットした珈琲ができ上がる頃になると、ドアが開く。

入って来たのは、藍より五歳上で、有能と名高い美男美女の同期コンビだ。

恋人同士でもなければ、示し合わせているわけでもないらしいが、大体ふたりは一緒に出勤してきて、朝から仲良く口喧嘩をしている。

肉感的で華やかな女性は、藤倉香菜。彼女の辛辣な言葉に負けじと声をあげるのは、爽やかスポーツマンタイプのイケメン、南沢慎也である。

「文句があるのなら、私より多く表彰されるか、難航不落な西条社長を陥落させてから言いなさいよ。チームリーダーの威信にかけて！」

「アポすら取れない厄介な相手だということは、お前も知っているだろうが。俺だって色々と考えているんだよ！」

ヒートアップするふたりの言葉が、ふと止まる。藍がにこにこ笑顔で立っていたからだ。藍の両手には、湯気がたちのぼる珈琲が入ったマグカップがある。

「おはようございます、リーダー、藤倉さん。まずは涼しい風に当たって珈琲をどうぞ。それと昨夜、今日のおやつ用におからクッキー作っただけです。よければ味見で一緒に！」

ふたりは、邪気のない藍の雰囲気のおかげでクールダウンすると、いつも通りの穏やかな顔に戻った。

「美味しい。北村ちゃん……、私の嫁に欲しいわ」

「北村は嫁というより、妙に所帯じみてオカン……を通り越して、ばあちゃん臭いところがあるよな。田舎のジジババのところへ行つたような、ほのぼの感というか……」

「南沢！ あんた、私たちより五つも若い北村ちゃんに、なんて失礼な……」

「いいんですよ。わたし下町生まれのひとりっ子で、年配の方に囲まれて育ちました。彼女たちから、シンママの母に代わって家事を教えてもらいましたし。母が再婚してからは、田舎のおじいちゃんも長く暮らして、高校からは独り暮らしを始めたので、ひとより生活臭が漂っているんだと思います」

笑って答えると、ふたりが妙にしんみりとしてしまった。

藍が慌てて弁解しようとした時、ピッと機械音がして冷風が止まる。

「黒鉄、お前……エアコンを消すな！」

南沢が文句を言った先には、ひよろひよろとして青白い顔をした男性が立っていた。黒鉄豊——  
藍より三歳年上の彼は、壁にあるリモコンをいじっている。

「現在、室温は二十二度。冷房は二十六度を保つために使用してください。経費の無駄遣いです」  
悪びれた様子もなく、彼は席につく。背広を脱いでも長袖のワイシャツである。

どこぞの妖怪物語の主人公のように、顔の半分が長い前髪で隠れており、その不気味さが冷涼感を醸し出す。

黒鉄は、藍と同じ時期に中途採用枠でシステム開発部へ入社したらしい。ITスキルがかなり高

く、分析能力に優れているためか、多少コミュニケーションで神経質気味でも周囲は目を瞑っているのである。  
(うう、せっかくのエアコンなのに、使わないなんてもったいない……)

黒鉄に砂糖山盛りカフェオレを出すと、今度はふたりの男性社員が現れた。

学生時代にアメフト部だったという山田剛と、柔道をしていたという太田清志だ。今年二十七歳のふたりは体格がいい上に暑がりりで汗っかきのため、すぐに冷房を入れてしまい、ひと回り小さい黒鉄に叱られている。

藍は簡易冷蔵庫に用意していた珈琲に氷を入れて、しよげるふたりに差し出した。  
最後に現れたのは、チームの指揮官である八城翔だ。

三十三歳の八城は、驚の如き鋭い目をした、野性味に溢れたイケメンである。

伝説級の営業力を誇り、最年少で営業部長職についた彼は、出世間違いなしと言われている。

藍が慌てて氷なしの冷たい珈琲を用意して八城に差し出すと、彼は喜んで一気に飲み干す。

「サンキュ。下で専務に会ったら専務室に連行されてな。北村のおかげで生き返った」

八城は一見近寄りたがたい印象があるが、実際はよく笑い、人懐っこい笑みを見せる。

三年前、文学部の大学生だった藍は、就活をするも全滅。就職浪人を覚悟した時、就職課の担当から面接を受けてみないかと勧められたのが、アークロジックだった。

八城は面接官のひとりであり、最初は怖いと思っていたが、入社後も顔を合わせれば気さくに声をかけてくれた。同じチームにいる今では、気軽に雑談もできる尊敬すべき上司だ。

すべてのメンバーが自席につき、各自が担当する外部団体との進捗状況を報告しあつた。

(わたしもこうやって、活き活きと担当のお仕事がしてみたいなあ)

藍は羨望の眼差しで、メンバーたちの言葉を聞く。

ここはアークロジックの各部署から選抜された、七名の精鋭社員が集うプロジェクト本部だ。東京の下町をターゲットに、自治体や組合などと連携しつつ、出店したい店主、土地活用をした地権者、施設を作りたい建設業者をとりまとめ、中心となって事業を進めている。

プロジェクトの総責任者は大江専務だ。八城のコネと手腕により可能となった管理事業なのに、重役会議で自らの手柄のように報告して鼻高々らしい。

八城は昨年末、メンバーを選出するため、部課や肩書きを問わずに企画レポートを募った。

題目は『東京下町の再開発』。

藍は、最初はこの新プロジェクトを他人事と思っていたが、下町が舞台だと知り、小学生の時まで母と住んでいた懐かしい場所を思い浮かべた。

人情味溢れた良いところだったが、その後に藍の黒歴史となったある理由から、冷たく手のひらを返された場所でもあった。

ノスタルジックな感傷に浸りながら、いつまでも温かく笑顔に満ちた町でいてほしかった……そんな思いをこめて、こっそり応募してみたところ、なんと採用されたのだ。

それまで先輩の補助や雑用しかしていなかった新米が、プロジェクトチームに抜擢されたのは異例のこと。一番驚いたのは藍だった。優秀な社員として常に名があがる、錚々たるメンバーに自分は未熟すぎるからと、辞退を申し出た。

しかし八城曰く、藍の企画書が一番具体的に住民目線に立っており、並々ならぬ熱を感じたとか。想定場所もちょうど、八城が狙っていた土地候補のひとつだったらしい。

『就職面接の時、お前は度胸と根性だけは自信があると豪語した。プレッシャーに負けず、企画書に込めた情熱を形にし、フレッシュな風を入れてくれ』

それを聞いて、藍は八城に、その下町は亡き母との思い出の故郷であると同時に、悪い思い出もあることを話した。正直、心の傷になっている場所と関わるのは複雑なのだ。

『お前の時間は止まったままなんだな。だったらこれから下町へ行くぞ。お前の時間を現実のものに合わせるために』

十五年ぶりに見る故郷は、老朽化が進み空き家ばかり。記憶より廃れて精彩さが無い。

藍はかつての住居付近を巡り、名を名乗ったが、覚えていた住民はひと握りだった。

母とここで生きてきた証が薄れている様は、母の死を二度受け入れるようで苦しかった。

『お前にとって特別な場所を、お前の手で守ってみたいと思わないか？』

自分に守れるだろうか。いや、自分が守りたい――

そうして藍は、下町改革プロジェクトの一員になる決心をしたのだった。

藍の願いから生まれた小さな企画は、八城を始めとした専門家の手で素晴らしい構想となった。

これは話題になると誰もが確信し、順調にプロジェクトは進められていったが、ただひとつ問題があった。……土地だ。

プロジェクトでは、イベントも開催できる公園を併設した、巨大複合施設が目玉だ。

今は工場跡になっっているその土地を、地権者がGOサインはおるか、話し合いの席にもついてくれないのだ。

旨味がある事業なのだから、必ず食いついてくる——そんな目論見を崩した地権者は、都心にある、創立七年目の不動産会社『カルブサイド』。西条グループの御曹司が社長を務めている会社だ。西条は歴史ある巨大グループであり、各界に影響力がある。その御曹司がずっとOKを出さない事業に参加していいものかと、せっかく決まりかけている施工業者も、入店希望者も渋り出す始末だ。

早急になんとかしてほしいと外部団体からも訴えられ、今はメンバーが一丸となって、どうすれば西条社長と交渉できるのかを模索していた。

そんなある日の午後、南沢が外から戻り、シュークリームが入った箱を机に置いてぼやいた。

「アポなし突撃も、強行突破もだめ。しかもあそこの社員、やけに強面で威圧的な男ばかりだから、社員と仲良くして……という懐柔案も無理。手土産にするつもりで買ったシュークリームは、後で皆で食べようぜ。そっちは？」

すると、藤倉が目元を押さえながら答える。

「コールセンターも含め、西条社長へのアポ、今日も全滅よ。山田と太田から連絡はなし」

体力に自信がある山田と太田は、交代で西条社長の動向を見張っている。車移動でもしてくれれば、そこに突撃できるのだが、社長は今日も動く様子がないようだ。夜遅くまで交代で見張っているのに、何時に帰宅しているかすらわからないという。

（見張り場所は毎回変えていると言っていたけれど、それでも捕まらないなんて、社長……会社を住居にして引き籠もっているのかしら）

黒鉄は得意のコンピューターを駆使して西条社長の情報を集めるが、どれもこれもが謎に包まれ、めばしい情報はない。写真も顔がよくわからないほど小さかった。

大きなため息をついた南沢は、ふと思いついたようにして藍に振り向く。

「なあ、北村。この前、郵送してもらった資料や書状に対する返事は？」

「一切、連絡ありません。見てくれたのかも謎です。メールも同様です」

「となれば、後は……自治体に協力要請に行っている部長に賭けるしか……」

しばらくして八城が戻り、メンバーたちは期待の目を向けたが、八城は首を横に振った。

「西条グループの力を怖がった自治体に、社長の父親である当主を動かすことを拒まれた。もしも土地問題が難航するようなら、別の下町に舞台を移した方がいいと言われたよ。それをなんとか保留にしてきた。せめて西条社長が、気乗りしない理由がわかれば、手を打てるんだが……」

藍は疲れた顔をした八城に淹れ立ての珈琲を差し出し、恐縮して言った。

「お疲れ様です、部長。お帰り早々で申し訳ありませんが、専務よりお電話が欲しいと……」

「早く結果を出したくて仕方がないんだろうな。これはまた専務のお説教コースだな」

片手で頭を抱えつつ専務と電話をしている八城を見て、藍もなにか協力できないかと考えた。

しかし、経験豊富な他のメンバーですら、どんな方法をとっても社長と会えないのだ。新米がアポなど取れるはずがないからと、電話かけを求められたことはないが、こうなればものは試しだ。

「これより北村、電話にて初アポ取り、行かせてもらいます」

メンバーたちは無駄だからやめておけと笑ったが、「新米でも女は度胸です」とガッツポーズで挑戦の意思を伝え、電話をかけてみた。緊張しすぎて、社名の次にフルネームを名乗ってしまったが、笑われることも断られることもなく、保留音に切り替わる。

しばらくして社長秘書だという男が電話に出て、社長の言葉を告げた。

明日の午後二時はどうか、と。

「あ、会ってくださるんですか!？」

藍は声を裏返らせ、電話の音がメンバーにも聞こえるように、スピーカー状態にした。

『はい。明日午後二時、少しだけなら我が社でお会いしてもいいと、社長の西条が言っております』

藍は電話を切ると、ちょうど専務との電話を終わらせた八城に、弾んだ声で報告した。

「部長、奇跡が起きました！ ビギナーズラックです！ なぜか西条社長のアポ、取れました！」

「本当か!? 北村、偉いぞ。よくやった!」

八城が喜ぶ隣で、他のメンバーは信じられないと、ただ口と目を大きく開けて固まっていたのだった。



打ち合わせ当日、午後二時前――

都心にある『カルブサイド』は、周囲に建ち並ぶ大手企業の本社ビルに引けをとらないほどの存在感を示していた。さすがは西条グループの御曹司に相応しい居城である。

(初めての打ち合わせ……緊張する。でも昨日メンバーの皆と事業計画書は作り直して、終電ぎりぎりまで策は練ったし、部長がいるんだし。なにより、あの時の恐怖に比べたら……)

脳裏に大広間に集うヤクザたちの姿が蘇り、藍はぶんぶんと首を横に振ってそれを振り払った。

「大丈夫か？」

八城が心配げに声をかけてくる。藍は大丈夫だと笑ってみせた。

「北村。母親との思い出の場所を、喜びに満ちたものにしたんだろう？ たとえ社長になにを聞かれても、俺の時と同じようにあの情熱を語ればいい。難しいことは俺がすべて引き受けるから」

「部長……。なんだか後光が差してます」

「なんだ？ 俺に惚れたって?」

八城がにやりと笑って冗談を言うと、藍はすつと笑みを引かせて即答する。

「いいえ、それはありません」

「秒殺かよ。ささいなことでも意識をされたら、それはそれで面倒だが、ここまで平然とぶった斬られると、男としての自信が……」

「モテる男性の自信回復は、他の女性でなさってください。……あ、誰か来ました」

オフィスのドアが開き、受付嬢から連絡を受けたと思われる男性が現れた。

社長秘書の安田と名乗った彼は、上等なスーツを着て、黒々とした髪をオールバックにしている。

「いらつしやいませ！ 社長室へご案内します！」

電話の声より、えらく威勢がいい。

(歓迎されているみたいだけど……これはいい兆しだわ)

安田はやけにちらちらと藍を見て饒舌に話しかけてくるが、八城には愛想がほとんどない。藍はそんな安田の態度を訝しがりながら、妙な既視感を覚えた。しかし今は記憶を辿るよりも、ひとりでも多く味方を増やそうと、愛想笑いをして安田の雑談に乗じる。

安田は最上階にある社長室のドアをノックして、ドアを開く。

「社長。アークロジックのお……いや、く……？」

藍の苗字が出てこないらしい。藍はこぼんと咳払いをして小声で援護する。

「北村と、営業部長の八城です」

「北村さんが見えられました。さささ、お……北村さん。社長のそばまでどうぞ！ 社長が、首を長くしてお待ちしています。では私はこれで」

社長室の奥に広がるのは、東京を一望できる大きな窓。

その前に、こちらに背を向けて立つ黒い背広姿の長身の男が、壮大な景色を見下ろしていた。

これが、難攻不落と言われる西条社長だろう。藍は名刺を用意して、元氣よく挨拶をする。

「西条社長。アークロジックの北村と申します。本日は営業部長の八城とともに伺いました。

お忙しい中、お時間を取っていただき、誠にありがとうございます……」

藍の言葉が切れたのは、黒髪の男がこちらを向いたからだ。

陽光が、男のシャープな頬を柔らかく照らす。

秀麗に整った顔、それは――

「社長の西条さんです」

どくん。

藍の心臓が、大きく跳ねた。

(まさか……)

艶やかな声。

光を浴びて金に輝く、琥珀色の瞳。

「お久しぶりですね、北村さん」

冷やかな美貌を魅せるのは、どう見ても――六年前に捨ててきたはずの男。

藍の初恋を踏みにじった、非情な男。

(どうして彼が、西条の御曹司になっっているの?)

藍が警戒に顔を強張らせると、目の前の男は口端を吊り上げた。

頭の中で、六年前の彼の声がリフレインする。

『いい夢を見れましたか?』

……そう言っているのだろうか、今もなお。

ぎりりと、蟬の羽音のような音を響かせたのは、歯軋りなのか、それとも心の悲鳴か。

(逃げ切れたと思っていたのに……!)

藍は唇を噛みしめながら、六年前の出来事を回想した――

※ ※ ※

『北村さん母子に声をかけたら、ヤクザに半殺しにされるんですって』

『草薙組組長の娘と話すのは、すぐにやめなさい』

ねえ、わたしがなにをしたの。どうしてわたしを嫌うの。

『藍、お引越ししよう。新しいパパのおうちに。今まで、パパがいなくて寂しい思いをさせてごめんね。これからは藍がお食事作ったり、洗濯をしたり、家のことをいろいろしなくてもいいのよ。新しいパパ、藍が欲しいもの買ってあげるって言ってたわよく。なにを買ってもらおうか』

わたし……お父さんがいなくて寂しいとか、家のことをするのがいやだとか、贅沢ぜいたくしたいとか、そんなことを思ったことはないの。頑張るお母さんの力になりたかっただけ。

『藍、幸せになろうね』

わたし、今までも幸せだったよ。お母さんが笑顔でいてくれれば、貧乏だってよかった。

わたし……ヤクザのおうちに行きたくない。ヤクザの子供になりたくない。

お母さんだけの子供でいい。それが叶わないのなら――

『ぎっくり腰になったおじいちゃんと暮らす？ あんな田舎いなかの山奥に!? お母さんは許さないわ！

藍がそんなに草薙組くさなぎぐみをいやがるのなら、お母さん、結婚を諦める……』

お母さんを悲しませたいわけじゃないの。大好きなお母さんは、笑顔で幸せになってほしい。

お母さんの結婚を反対しないから、独りで暮らしているおじいちゃんのところに行かせて。わたし家事はできるし、ちゃんとおじいちゃんおじいちゃんの看病をする。おじいちゃん、心配なもの。

『どうしても……行ってしまうのか？ ヤクザのおじいさんは嫌いか。家族になったのに、同じ家に住んでお父さんと呼んではくれないのか。そこまでヤクザを嫌うのは、なにか怖い目にも遭ったのか？』

前にヤクザが、近所の駄菓子屋のおばあちゃんとお店に、ひどいことをしていたの。だからわたし、おばあちゃんを守ろうと噛みついてたら、たくさん叩かれて。

ワンワンが助けてくれなかったら、わたし……死んじやっていたかもしれないんだって。

だからヤクザは嫌い。大嫌い――

「ん……」

そこで藍は目を覚ました。

築三十年の古ぼけたアパートの一室に、じりじりと喧やかましい蝉の音が響いている。

テーブルにあるのは書きかけのレポートと、積まれた本。

隣には――テーブルに片肘をつき、こちらを涼しげに見ている美貌の青年がいた。

さらさらとした黒髪に、上品に整った秀麗な顔だち。

「おはよう、藍」

彼の美しさを際立たせるのは、魅惑的な琥珀色の瞳だ。

蜂蜜のような甘さを滲ませていて、ついつい吸い込まれそうになる。しかし安易に近づこうものなら、ばつさり切られてしまうような剣呑さも併せ持っていた。

彼は隣室に住んでいる、一ノ瀬瑛。

藍より三歳年上で、都内にある大学の四年生だ。今年二流大学にぎりぎり合格した藍など足元にも及ばない、難関大学に通っている。

瑛は、高校生だった藍がこのアパートでひとり暮らしをする前からの住民で、雨漏りをしたり台風で窓が割れたりして心細い時、力になってくれた。藍が進路や成績不振に悩んでいる時も親身になり、夕食のご馳走という報酬だけで家庭教師までしてくれた。そのおかげで、藍は志望大学に現役合格できたのである。

卒論で忙しくても、今もこうして藍のSOSに駆けつけてくれる彼には足を向けて寝られない。

「これは、そこにある洋書の要約。レポート残り九枚、頑張れ」

「ごめんなさい！ 瑛を働かせておいて、わたしは寝ちゃうなんて……」

「いいよ、おかげで藍の寝顔が見られたし。涎を垂らして大いびき。十九歳の女子大生とは思えないほど豪快だったけど。写メ、見たい？」

藍の顔から血の気が引いた。

「……なんてね、嘘だよ。あはははは」

「もう！ 意地悪なんだから！」

涙目で瑛をぼかぼか叩くと、彼は笑ってその手を受ける。そして顔を背けて、湿った咳をした。

「ただの夏風邪だ。少し前に薬を飲んだから、大丈夫。俺は元気だから、そんな顔をしないで」

(体調不良なのに悪かったわ。……瑛を看病したい女性、たくさんいるんだろうな……)

瑛には不思議と女性の影がない。女嫌いではないようだが、色目を使う女たちに辟易しているらしく、今は学業に集中したいとのこと。

しかし、藍だけは特別だよと、瑛はいつも笑う。妹みたいなものだから、と。

だから藍は言えなかった。いつしか瑛に向ける情は、頼り甲斐がある兄への思慕から、異性に対する恋情へと変化していることを。

女性として意識されたいと、化粧をして肩までの黒髪を巻いてみても、瑛と同じ甘いムスクの香水をつけてみても、瑛は出会った時のまま。三歳の年の差は、思った以上に距離があった。

ならば、誰よりも近くにいたい。妹ポジションでもいいから、一番に理解し合える近い関係でいたい——それが藍の現在の願いだった。

「そういえば、藍、うたた寝で時折うなされていたようだったけど……」

「ん……昔のことを夢見ていたの。お母さんの再婚で、草薙組組長の娘になった途端、腫れ物を通り越して罪人扱いした下町の皆のことや、その後のこと」

藍が今まで、自分から家庭環境について話したのは、瑛ただひとりだ。

恋する相手に隠し事をしたくなかった藍は、ありのままの自分を愛してほしくて、ありったけの勇気を振り絞り、身の上話をしたのだ。

その結果、彼は変わらずそばにいてくれている。たとえそれが兄としての立場であろうとも。藍が瑛を異性として欲しながらも、今の関係をあえて崩そうとしないのは、今まで通り差別なく接してくれるだけで嬉しいからというもある。

「おじいちゃんがぎっくり腰にならなかつたら。おじいちゃんと暮らすことに反対したお母さんを、組長さんが説得してくれなかつたら。ぎっくり腰が治ったおじいちゃんが、帰りたいと泣いたわたしに味方してくれなかつたら——わたしは大嫌いなヤクザの本家で暮らしていたのよね」

藍が高校に入った時、祖父が亡くなった。再び母に呼び戻されそうになったが、親の庇護が必要なし子供ではないと拒んだ。長い話し合いの末、渋々出された条件は、母のいる東京に戻ることに、社会人になるまでは今まで通り生活にかかる一切の援助を受けることのみだった。

どうしても娘のためになにかしたいと泣く母に折れ、藍の独り暮らしが始まった。

そして母が用意した住まいが、最寄りの駅から遠い、この築三十年のアパートだったのだ。

母はなぜか、かなりここを気に入っているらしかった。確かにスーパーが近くにあるのは便利だし、長く親しんだ下町の住まいによく似ている。賑やかな地域ではないが、居心地がよかった。

「早くから親元を離れたけれど、お母さんは過保護なほどいつも気に掛けてくれて、組長さんによく会いに来てくれた。そばで甘えられないのは寂しかったけれど、捨てられたわけじゃないし、不幸だと思ったことはないわ。綺麗になつていくお母さんを見るのは複雑だったけど、わたしを養うために色々我慢してきたお母さんに、新婚生活をプレゼントできたのはよかったと思ってる」

藍が笑うと、眼鏡を外した瑛の目が柔らかく細められた。

琥珀色の瞳が、光に反射して金色に輝いて見える。

「瑛の瞳って、本当に綺麗だよ。わたしなんかの野暮ったい黒とは違って」

まるで蜂蜜や、飴細工のような黄褐色——

「そんなことを言うのは藍くらいだ。この瞳、獣じみていて、気持ち悪がる奴も多いから」

「こんなに素敵な瞳を気持ち悪いなんて言うひとの気持ち、全然わからないや」

この琥珀色の瞳が熱で蕩けたら、彼の香りのように甘くなるのだろうか。

それとも、獣のように、野生の男らしさを引き立てるのだろうか。

……そんな彼を間近で見ることができる女性は、どんなひとなんだろう。

つらつらと考えていると、いつの間にか至近距離に瑛の顔があることに気づき、慌てて離れた。

「藍。きみは大学やサークルでも、そうやって男に無防備に近づくのか？ 警戒せず」

瑛の声は、どこか怒っているような、不機嫌なものだった。

「ちゃんとしているわ。瑛相手には、警戒なんてする必要がないだけよ」

藍は、彼を男として意識していることを悟られまいと笑った。ばれてしまえば、彼が厭う女のひとりにされて煙たがられてしまう。こんな風に、そばにいられなくなってしまうかもしれない。

「……警戒、しろよ」

ふと投げかけられた声は、恐ろしく低いものだった。

ぞくりとしたものを感じた瞬間、藍は仰向けになり、ラグの上に押し倒されていた。

「瑛？」

真上から見下ろす琥珀色の瞳には日頃の穏やかさはなく、熱を滾らせている。

藍が今まで見たこともない、獯猛ななにかを秘めているようで――

「俺を警戒しろよ。俺が、きみを騙している悪いヤクザだったらどうするんだ」

双眸の強さとは相反して、実に弱々しく絞り出された声だった。

「瑛がヤクザ？　ありえないよ。それにわたし……瑛を信頼しているから。瑛はヤクザのように、わたしの嫌がることをして怖がらせたりしないって」

絶大なる信頼があることを迷いなく告げた藍に、瑛の目がぎゅつと苦しげに細められる。

そして、形いい瑛の口から苦しげな声が漏れた。

「……つくしよう」

次の瞬間、藍は両手首を頭上で縫い止められ、瑛に強引に唇を奪われた。

「……っ!?」

唇に感じる熱と柔らかさ。噎せ返るようなムスクの香り。

今、一体なにが起きているのだろうか。

驚きのあまりパニックになった藍の呼吸が止まる。それでも口づけは荒々しく、角度を変えて何度も繰り返された。やがて息苦しくて薄く開いた藍の唇から、瑛の舌が捻り込まれる。

それは獯猛に暴れ、藍の舌にねつとりと絡みついた。

(なにこれ……)

瑛の舌で弄られ、輪郭を持たないもどかしい痺れが身体に走る。この微弱な電流のようなものは

次第にぞくぞくとした気持ちよさに変わり、藍は甘い声を漏らさずにはいられなかった。

好きな男にキスされている――その歓喜が藍を昂らせた。こんな大人のキスは、兄と妹ではない。……欲情、してくれたのだ。女として意識してくれたに違いない。

藍は瑛に誘導されるがまま、ぎこちなく舌を動かす。すると悦んでいるみたいに濃厚に舌を搦めとられ、口づけが深まっていく。

(ああ、わたしのすべてをあげるから、もっとその灼熱で溶かしてほしい……)

そこで藍はたと我に返る。

(……灼熱?)

瑛の身体があまりにも熱すぎる。男は欲情すると、こんなに発熱するものなのだろうか。

まさか、と訝った藍が、瑛の額に手を置いた瞬間、瑛がげほげほと湿った咳をする。

ああ、これは間違いなく熱がある。瑛がおかしいのもこのせいだ。

現実なんて、こんなものだ――泣き出したい心地にならながらも、藍は自分のベッドに彼を寝かせようとした。だが、またはもや力尽くでその場で組み伏せられ、唇を奪われてしまった。

陶然とした至福感を強制的に与えられる中、行為はさらに進む。瑛の片手がキャミソールごと藍のチュニツクを捲り上げ、レースがついたピンク色の下着ごと胸を揉みしだいていく。

やがて下着がずり下げられ、瑛の唇が尖りかけている胸の蕾にちゅうと吸いついた。

「ひゃ……っ」

ぴりっと痛いような、それでいて甘美な痺れが全身に広がり、藍の身体が跳ねた。

瑛のくねらせた舌で愛でられた蕾は、赤くぷくりと膨れ上がり、舌先で揺らされたかと思うと、唇で引つ張られ強く吸われる。その愛撫は未知なる快感を生み、藍をぞくぞくさせる。

「あああつ」

瑛の吐く息が熱く荒い。普段見せない瑛の“男”を感じて、藍は悦びに弾けそうになる。ずっと待っていたのだ。彼に女として愛される日を。

しかし、これはきつと……刹那のひととき。一過性の熱とともに忘れられてしまっただろう。そう思うとひどくやるせなく、少しくらい思い出を残したいと願った。

瑛の記憶に留まらなくても、この気持ちだけは偽りや幻で終わらせないために――

「好き……」

藍が気持ちを吐露した途端、瑛の目が大きく見開かれた。

ぶれていた焦点が定まり、熱に浮かされた自分がなにをしていたのか悟ったようだ。

後悔、罪悪感、恐怖……様々な感情をない交ぜにした顔をして、瑛は藍から飛び退いた。

「藍、ごめん。俺……どうかしていた。藍に手を出すなんて……」

藍を女として扱うことは、瑛にとっては“どうかしていた”こと。

生まれて初めての愛の告白は、皮肉にも瑛を瞬時に正気に戻すほどの威力――愛などはそこないと突き放されたのだ。

わかつてはいたのだ。完全に一方通行なのだ。それでも予想以上に拒絶されたのはショックで、藍は嗚咽が漏れそうになる唇を噛みしめ、服を整えることしかできなかった。

そんな藍の横で、瑛は苦しげに天井を振り仰ぐと、小さく呟いた。

「ごめん。………から」

最後、なにを言ったのかよくわからない。だがきつと、すべてなかったことにしたいと告げたのだらう。藍が告白したこともすべて。

藍の目に涙が溢れる。それを隠そうと俯いたら、ドアが閉まる無情な音がした。

ひとり残されたことを悟ると、藍の目から涙がとめどなくこぼれ落ちる。

告白などしなければよかった。ただ心のない人形のように、瑛に抱かれていればよかった。

たとえすぐに終わりを迎えるものでも、ひとときぐらい、幸せな夢を見られたのに。

じりじりと聞こえる蝉の声。それはまるで藍を嘲笑っているかのようだ。

その不快な音は藍の身体を蝕み、ぎりぎり胸を締め上げてくる。

たまらず藍は、その場で膝を抱えて小さく丸まった。

「大丈夫。いつもこうやって自分を励ましたら、ひとりでもなんとか頑張っただけじゃない」  
流れ続ける涙を手で拭いながら、藍は痛々しく笑い、己に言い聞かせた。

「明日、瑛になんでもなかったような顔をすれば、また妹としてそばに置いてもらえる。瑛の熱が下がったら、きつといつもの瑛に……いつもの関係が戻ってくる……」

この時の藍は信じていたのだ。明日になれば、瑛に会えると。

まさか藍が大学でレポートを提出している間に彼が引越し、連絡がつかなくなるとは予想だにしていなかったのである。

瑛がいなくなつてから、一ヶ月が過ぎた。

蒸し暑さを増長させていた蟬はいなくなつたが、依然酷暑は続いている。

隣室は今日、新たな住人を迎えた。

瑛が消えた現実が耐えきれず、藍は思わず外に飛び出し、涙で滲んだ空を見上げた。

どこまでも澄み渡つたスカイブルーが、眩しかった瑛の笑顔に重なる。

好きだった。本当に好きでたまらなかつた。

たとえ熱のせいでも、消え去らないといけないほど、自分は触れる価値のない女だったのだから。

それとも、絶縁するのが彼なりの責任の取り方なのだろうか。

あれが最後とは、あまりにつらすぎる――

涙がひとしずく頬を伝い落ちた時、キキーツと急ブレーキの音がした。

何ごとかと振り返れば、背後に黒塗りの車が停まり、中から黒服の男たちが降りてきた。

「自分たちについてきてください」

問答無用で腕を掴んでくる男たちに、藍は恐怖を感じて抗った。

「な、なにをするんですか！ 大声を出してひとを呼びますよ！」

それでも退こうとはせず、じりじりと壁際に追い詰めてくる。藍が助けを求めようと声をあげると、男たちは顔を見合わせて藍に飛びかかってきた。そして強い力でひとりが藍の口を手で塞ぎ、もうひとりの男が藍の身体を抱えて後部座席に押し込めた。

慌てて逃げようとしたが、両横に座ってくる男たちに阻まれたまま車が発進してしまう。

藍が青ざめていると、助手席から声がした。つるりとした丸刈り頭の男だ。

「お嬢、手荒な真似をしてみません。黙って自分たちについてきてください」

「お嬢――そう呼ぶ相手は限られている。」

「自分らは草薙組の者。昨日、お嬢の義父君である草薙組組長と、お嬢の母君である姐さんが……

事故に遭い、お亡くなりになりました」

……なにを言われたのかわからなかつた。

「なんの冗談……」

「冗談でも虚言でもありません。これは事実です」

瑛を失ったショックで朦朧としていた頭が、途端にしつかりする。

「誰かに殺されたということ？」

「いいえ。事件性はなにもないとのこと。おふたりでドライブをお楽しみ中、土砂降りに遭い、崖から転落したということです」

藍はスマホを取り出し、慌てて母親に電話した。だが、何度かけても通じない。

「――これから、おふたりが眠る草薙組にお連れします。お気をしつかりお持ちください。お嬢」

どうしつかり持てばいいというのか、突然の母親の計報に。

車は、藍が生まれ育った懐かしの下町を横切り、隣町へ向かった。やがて城壁の如き高い石垣が現れ、それを横目にしばし進むと、『草薙組』の看板がかけられた物々しい正門が出てくる。

横にあるシャッターが自動で開いた後、車はその中を進んでいった。草薙組の本拠地は、日本庭園を有した平屋造りの純和風の屋敷だ。

凶悪な風格をした男たちがずらりと並び、一斉に頭を下げて出迎える中、車を降りた藍は丸刈り頭の男の後について、砂利を踏みしめて進んでいく。

やがて丸刈り頭の男が、開け放たれたままの入り口の横で頭を下げ、中に入るよう促した。重厚な鎧兜が鎮座したエントランスホール。

そこで待ち構えていたのは——濃藍色の着物を着た男。笑みを湛えたその整った顔には、見覚えがある。

「……瑛!？」

その男は藍の呼びかけには答えず、恭しくその場で片膝をつくど、頭を垂らして言う。

「——俺の名前は草薙瑛。組長と養子縁組をした、お嬢の義兄。組長……親父さんに命じられた、お嬢の目付役であり、草薙組若頭をしています。以後、お見知りおきを」

「な……」

『俺を警戒しろよ。俺が、きみを騙している悪いヤクザだったらどうするんだ』

『若頭、目付……ヤクザ……』

しかもチンピラではなく、生粋のヤクザで、存在すら知らなかった義兄だという。

「わたしが、組長の娘だと知っていたからなの？　ずっと隣にいて、優しくしてくれたのは」  
すると瑛は顔だけを上げて、藍を見た。

そこには穏やかさもなにもない、底冷えしそうな金の瞳を光らせた、冷淡な顔がある。

「俺はお嬢の目付役兼若頭として、組長の愛娘であり我が義妹が不自由なよう、命を受けて近くで守りしていただけです」

組長命令——

藍の全身から、血の気がさああと引いていく。

すべてが演技。すべてが命令。彼は任務遂行のために、優しいふりをしていただけ。

「……守る？　勝手にいなくなつたのに?」

藍の喉奥から、掠れた声<sup>あざ</sup>が吐き出される。

瑛は悪びれた様子もなく、淡々と答えた。

「時期が来たので、家に戻つただけのこと」

瑛は無表情のまま、口端だけを吊り上げた。

「……お嬢。大人流のお別れの挨拶で、いい夢を見れましたか?」

『藍、合格おめでとう!』

『藍の料理は、癒やされるよ』

瑛に恋したすべての思い出にびしりびしりと音を立ててヒビが入り、ガラガラと崩れていく。そして残ったのは——自分に傳く見知らぬ男。

コノオトコハダレ——？

……いなかったのだ、自分が慕った男など最初から。

冷たく凍ったものが、心に空いていた穴を埋めていく。

さすがは凶悪なヤクザだ。こうも簡単にひとを騙し、恋心すら蹂躪するとは。

ヤクザ嫌いを公言する女が自分に懐く様を、どんな気持ちで見ているのだろう。

……ああ、もう散々だ。でも、誰が泣いてやるものか。

彼に片想いをしていただけ、裏切られた悲しみと憎しみが募る。

(そりゃあ熱を出したりして正気を失わない限り、監視対象に手は出さないわよね)

勝手にのぼせたのは、自分の方——

だとすれば、この恋心を凍りつかせればすべてが終わり。

「ええ、いい夢を見せてもらったわ。お役目ご苦労様」

わざと微笑んできると、わずかに琥珀色の瞳が剣呑に細められる。

「——任務は終了よ。わたしの前から消えて」

藍は怒りを込めて、瑛を睨みつけた。

それは藍からの絶縁状でもあった。

監視しているヤクザに恋をしていたなど、虫唾が走る。

もう二度と、心を揺り動かされるな。

……どんなに心が痛くて、壊れそうに軋んだ音を立てていても。

「消えて、と言うのもおかしいわね。ここはあなたの本拠地。消えるのはわたしだけ。……帰る。

ここはわたしのいるべき……いいえ、いたいと思える場所じゃない」

妙な静けさに包まれた中、他の組員たちはなにを思い、若頭に突っかかる藍を見ているのか。

藍はヤクザの世界など知らない、素人の小娘だ。

けれど、素人の小娘なりの許せないものがある。穢されたくないプライドがある。

瑛に背を向けた藍が静かに歩き出す。瑛への未練を切り捨て、颯爽と。

「お嬢」

瑛が呼んだが、藍は振り向かなかった。

『お嬢』なんて知らない。自分の名前は北村藍。ただのしがない女子大生だ。

もう、その声に惑わされない——

そう強く決意する藍に、冷ややかな声で瑛が続けた。

「お母様が、この奥で眠られています。茶毘に付す前にお会いください。最後ですから」

びたり、と藍の足が止まる。

瑛は、自分にとって大切なものがなにかを把握している。効果的なものがなにかをわかっている。……それなのに、この恋心は完全無視して。

『いい夢を見れましたか？』  
(なんて……非情い男)

冷房の効いた大広間には、母親と義父がふたり、ドライアイス入りの布団に安置されていた。白い布を捲ると、薄化粧をして眠ったままの母が、うつすらと笑みを浮かべている。

『はい、藍。幸せのたこ焼きひとつ！』

『藍、元気にしていた？ 藍に似合うと思って、可愛い洋服買ったの』  
一緒に暮らしていなくても、ずっと愛情を注いでくれた母。

こんなに早くこの世からいなくなるとわかっていたら、親孝行をたくさんしたのに。

「お母さん……」

母の顔は冷たく、呼びかけに応えてくれない。優しい声は、もう返ってこない。

「お母さん……目を開けて」

それが死というものだど理解した途端、藍の背中に冷たいものが走る。

「わたしをひとりにしないでよ！ お母さん……お母さああん！」

寒気と窒息感が藍を襲う。水でできた、孤独の檻に閉じ込められたかのようなだった。

藍はひとしきり泣きじゃくった後、今度はゆっくりと組長の白布をとった。

下町の公園で初めて会った時より、痩せて皺が増えていた。

『……なあ嬢ちゃん。子供の立場からすると、新しい父親が突然できるのはいやか？』

藍は震える唇を噛みしめると、居住まいを正して組長に語りかける。

「……腰抜けだだって思ってしまったってごめんなさい。ヤクザが嫌いだと言ってしまったってごめんなさい。おじいちゃんとの暮らしを後押ししてくれて、感謝しています」

藍は呟いた後、組長に向けて深々と頭を下げた。

「長い間、母を幸せにしていたら、ありがたうございました。そして——お疲れ様でした。ゆっくりおやすみください。……お義父さん、お母さん」

初めて口にする義娘としての言葉。生前に伝えられなかったことを悔やみながら。

藍の気持ちも落ち着いてきた頃、見計らったかのように瑛の艶あるバリトンの声が聞こえた。

「お嬢、よろしいでしょうか」

返事をする前に襖は開く。瑛を先頭に、背広を着たインテリ風の男、そして丸刈り頭の男を含めて五人の組員が、物々しく入ってくる。

インテリ風の男は、組長の横に正座して言う。

「草薙組顧問弁護士で、組長付の御子神と申します。本日は組長の遺言状をお持ちしました」

御子神は手にしていたトランクケースを開けると、中に入っていた紙を巻物のように広げる。

「組長はこう遺言されました。もしも自分に万が一のことがあれば、草薙組は——お嬢様であられる藍様に任せたいと」

藍は、なにを言われたのか理解ができず、目を瞬かせた。

すると腕組みをしていた瑛が、藍に説明する。

「つまり——次期草薙組組長は、お嬢だということですよ」

「はいいいいいい!？」

藍は正座をしたまま、その場で跳び上がる。

「なんでそうなるの! それ、偽物よ。ただの女子大生に組の命運賭けるなんて、そんなこと組長がするわけないじゃない!？」

そう叫んだ藍に、御子神が無表情のまま言う。

「これは組長の直筆の遺言状であり、正式なものです。組長は、藍様を次期組長に任命されました。なお、遺産相続については、藍様が組長になられた時に手続きするようにと言われております」

淡々と語られるが、藍からすると簡単に受け入れられるはずがない。

義父は、藍がヤクザを嫌っていることを知っていた。それなのに、そんな遺言を残したというのなら、それは嫌がらせの域を超えている。なぜ組長などしなければいけないのか。

「いやよ、絶対いや! わたしは遺産なんていらぬし、若頭がいるんだから、彼が組長になればいいじゃないの。そのための肩書きと序列でしょう!？」 その方が組も安泰だし、外に示しもつくし……」

「お嬢。組長の命令は絶対です。それが遺志であるのなら尚更」

瑛は、表情を崩さず抑えた声でそう言い切り、続けた。

「俺は賛成です。組長があなたを次期組長だと言うのなら、任せたいと思えるほどのものがあつたからでしょう。我ら組員は、組長に服従を誓っております。……お前ら、異存はないな!？」

すると組員たちは「ありません!」と声を揃える。

「おかしいわよ!」

「なにもおかしくありません。……大丈夫、俺があなたを支えます。あなたはなにひとつ不安に思うことはない。そのままのお嬢でいてください」

にこりと笑った顔は、藍がよく知る優しい隣人の顔をしていたが、藍は真つ青な顔で首を横に振り続ける。……ありえない。組長をするなど。

「それと、お嬢には申し訳ないですが、組長が亡くなった事実は隠し通せませんので、五日後の大安に、組の襲名式を行います。それまで、この屋敷にいてもらいますので」

事実上の監禁宣言。しかも瑛は、五日後に地獄の宴が催されることを宣言したのだ。

「冗談じゃないわ! わたし、帰る!」

「だめです」

「だめと言われても帰るから!」

帰る場所などない。それでもここから出たい。

だが——

「だめだと言っているだろう! お嬢が帰るのは、俺がいるこの組だ!」

畳をバアンと叩き、爆ぜたように叫んだ瑛に、藍は怯んでしまう。

ああ、やはり彼はヤクザなんだと、藍は失望と諦観する気持ちを持つしかなかった。

草薙組の歴史は比較的新しい。藍の義父である草薙寛は四代目組長になる。

草薙組は代々息子に恵まれないため養子をとることが多く、その結果、血よりも濃い親子関係が築かれたという。

指定暴力団など大組織に属さない独立した組であるものの、創立当時は近隣にあつたいくつかの組と、支配権を巡つての抗争はあつたようだ。それを藍の義父が主体となり休戦協定が結ばれ、草薙組は、地元住人にも穏健派ヤクザとして受け入れられるようになったらしい。

草薙組本家は広大な敷地を有している。日本庭園を取り囲むように母屋と、組長と親子の盃を交わした子分たち約五十人が共同生活をする数棟の離れがある。

組長と兄弟の盃を交わした者は舎弟と言ひ、子分たちからは『叔父貴』と呼ばれるが、舎弟は組の継承権がないため、屋敷の外に住んでいた。

そんな事情を頼んでもいないのにぺらぺらとしゃべつたのは、ヤスと呼ばれる丸刈り頭の男だった。彼は子分たちを束ねる兄貴格で、瑛の忠実な部下でもあるらしい。

彼は離れの一室にいる藍に食事を運んできたのだが、藍からハンガーストライキを宣言され、戻るに返れなくなつてしまった。少しでも藍の心を解かそうと、フレンドリーに接しているのだが、食事の話題になると藍はつーんと横を向いてしまう。

「お嬢、食事をとつてくださいよう。お嬢が食べているのを確認しないと、俺、若に怒られてしまいます。あのひと、とつても怖いんですよう。だから俺、髪が生えないんです」

突っ込んでほしいのか、真面目な訴えなのか微妙なため、髪云々は聞いていないふりをした。

薄い眉毛を下げた顔もその言葉も、ヤクザらしからぬ情けないものだ。拉致した時はもつときりつとしていたように思えたが、子分たちの手前、そう振る舞つていただけなのかもしれない。

(ヤスさん相手ならわたしが絆されると思つて、瑛は彼を寄越したんだわ。まあ、単純に顔を合合わせたくないから、ヤスさんに小間使いをさせているのかもしれないけど)

板挟みになるヤスのことは気の毒に思うが、こちらも人生……いや、命そのものがかかっている。遺言書が公開されてから今日で三日目。何度か気まぐれに現れる瑛に直訴はしたが、聞く耳を持たない。藍よりも、組長の遺志の方が最優先されるべきものだと言わんばかりだ。

アパートにいた時は、どんな状況でも藍の言葉には耳を傾けてくれたというのに、今ではもう見る影もない。瑛は、情け容赦ない——ヤクザなのだ。

何度か脱出を試みた。しかし見張りを撒いても、神出鬼没な瑛に連れ戻される。そしてそのたびに見張りがレベルアップし、今ではプロレスラーのようなごつい巨漢たちが、ずらりと廊下に並んでいる。その異様な迫力にたじろぎ、トイレすら気軽に行けない。

正攻法が無理ならばと、ハンガーストライキを敢行することにしたが、なぜか藍よりも食事を勧めるヤスの方がげつそりとして、今にも倒れてしまいそうな顔色をしていた。

「ヤスさん、おかしいと思わない? 組長と血も繋がっていない女が、ヤスさんの組のトップに

なつて、服従しないとイケないのよ？」

「組長が決定されたことですから」

「ずいぶん組長は、自分を飼ひ慣らししていたようだ。その返答に迷いやブレはない。

「自分たちは組長に大恩があるんです。居場所と生きる意味をもらいましたから。そしてお嬢は、そんな組長の恋を実らせたキューピッド。組長の恩人は、自分たちの大恩人でもあります。だから、組長の決定には喜んで従います」

「組の命運かかっているのよ!? あなたたちの居場所を、わたしに潰されても構わないと言うの?」

「……ならばそれこそ組長が望んだことだと、皆が納得します。いや、若が納得させるかと」

自信満々に答えるヤスに、藍はさらに説得を試みる。

「ねえ、若頭は組のナンバー2なんでしょう? 養子縁組までして組長に可愛がられていたのなら、彼が組を継ぐべきよ。それとも、そこまであの若頭は人徳がないの?」

「人徳なら十分過ぎるほどありますよ。若は、組長とはまた違うカリスマです。今どきのヤクザは世襲性ではないですからね。ただ、若は組長に拾われ、学歴をつけてもらい、親にまでなつてもらつた———そこまですべて愛情をかけられた恩は死んでも果たしたいと、常日頃より自分たちに語つてますから、組長の遺志は必ず遂行させるでしょうね」

心酔する組長からの命令があれば、彼はなんでもする。そのためには、藍の恋心なんてどうでもいいのだと思ひ知らされ、傷がまだ癒えていない心がじくじくと痛む。

「だったら若頭は、組長に忠実な飼ひ犬なのね。若頭という肩書きは、名ばかりつてこと?」

ヤスに当たつても仕方がないと思うが、ここまで見事に藍の意思を無視されれば、文句や嫌味を言いたくもなる。するとヤスは、慌てて首を横に振る。

「とんでもない。若は『死の猟犬』と呼ばれ、皆から恐れられる怖いひとなんですよ」

(「死の猟犬」? なに、その……物騒すぎるふたつ名は)

ヤス曰く、瑛は昔からよく他組の男色家から狙われたらしいが、誰もが例外なく、えげつない返り討ちにあつたとか。ヤスは瑛の握力は半端ないからと笑うが、その握力でなにがどうなつたのかは、あえて聞き流した。

また、別組の会長が草薙組組長を狙つたと知るや、瑛は単身丸腰で乗り込み、傷ひとつ負わずに組員を素手で叩きのめした後、恐怖に震え上がる会長を舎弟にしたとか———武勇伝は尽きない。

そうした無敵伝説を誇る瑛の活躍により、草薙組は小さいながらも極道界で一目置かれるようになり、組長は周辺の組との休戦協定を結ぶことができたらしい。

今の瑛は落ち着いて、頭脳派のインテリヤクザに転向しているという。

(穏やかで柔和な大学生に見えていたけれど、その時点でわたしは騙されていたのね。ここで反抗的な態度を取り続けているわたしが無事なのは、奇跡なのかもしれない)

「若は敵に回したら怖いですが、味方になれば心強い。組長亡き今、若の主人はお嬢です。しっかりと手綱を引いてください」

「それは無理よ。わたしは組長にも瑛の主人にもなる気はない。元の世界に帰らせてもらおうわ」  
藍が即答すると、ヤスは屈託なくカラカラと笑つた。

「それこそ無理な話です。若はお嬢を離しませんから。若にはお嬢を突き放しても、お嬢の前から消えるという選択肢はありやしません。お嬢への溺愛度は半端ないっすから」

溺愛とはなんだろう。不快感と違和感しか残らない。

思わず顔を顰めた藍を見て、ヤスが苦笑して説明した。

「ヤクザにとって『お嬢』という存在は神聖な溺愛対象なんです。特に草薙組にとっては、お嬢は組長の恩人でもある愛娘。今回だって、お嬢がここに来るとわかった途端、組長を亡くして泣いていた組員たちは不謹慎にも浮かれ出し、床屋に散髪に行つて無精髭を剃ったくらいです。いいですよねえ、散髪するだけの毛があつて。俺は磨くしかできませんでした」

ヤスは、つるりとした頭を手で撫でた。

彼はどう反応してもらいたいのだろう。藍はとりあえず空笑いをして流した。

「若はお嬢を出迎える際、若頭の襲名時に逃えた藍染めの着物を身につけた。なぜ今まで眠らせていたそれを選んだのか、お嬢はおわかりですよね」

……『藍』だから、とても言いたいのだろうか。

自分と同じ名ものを身につけていたからといって、それが溺愛の証になるとは限らない。

溺愛されていたら、アパートであんなに拒まれることはなかっただろう。

大体、本人が騙していたことを認め、監禁してまで無理矢理組長にさせようとしているのだ。

「ねえ、お嬢。どこへ逃げても、死の獵犬、は地の果てまで追いかけて、邪魔だてする相手の喉笛を噛みちぎります。若が本気で狩りに出れば、お嬢は骨までしゃぶられますよ」

ヤスは笑った。彼もまたヤクザだと思ひ知らされるような、嗜虐的な笑みを見せて。

(ま、負けないんだから。……まずは、ひとりきりにならねば)

「ふう。ヤスさんとの会話が楽しくてお腹が空いた気がするわ。少し食事をいただくようかしら。でも見られていると恥ずかしいから、ひとりにさせてくれる？ お願い」

あざとい上目遣いで頼むと、ヤスは少し赤い顔をしてふたつ返事で出て行った。

こんな手が通用するとは、なんともチョロいヤクザである。

「ヤクザの脅しに屈して、人生詰んでたまるもんですか！」

ヤスが退出した後、藍は食事など見向きもせず、決意を新たにす。

「逃げる。相手がどんな怪物であろうと、とにかく逃げ切つてやる！」

部屋には窓があるが、以前窓から逃げようとしたところ、待ち兼ねていた瑛に捕獲されて失敗。今では格子柵が取りつけられてしまった。

「こうなつたらプランB。この畳を捲つて、床下から外に出るしかないわね」

策を練る時間なら十分あった。今の時代、スマホで色々と調べられるから便利である。本来ならば畳を返すのに専用の道具が必要らしいが、ドライバーでもできるらしい。それならば箸でも転用できるだろうと思ひ、それを手に入れるため、食事を残してもらつたのだ。畳の縁の部分に箸を差し込み、てこの原理で持ち上げる。

「は、箸が折れる……！ でももう少し、もう……よし、畳を掴んだ！」

「……お嬢。あなたも懲りないひとですね」

突然聞こえた声に振り返ると、藍色の着物姿の瑛が腕組みをして壁に凭れて立っている。  
(いつ、部屋に入ってきたの!?)

「床下から、あなたの嫌いな虫やらネズミやらが出てくる可能性を考えていませんね」  
驚きのあまり手から滑り落ちた畳に近づいてきた瑛が、その上を片足で踏みつけた。  
しんと静まり返った中、八畳間の和室が華やかなムスクの香りで満ちる。

どこまでも甘美で、心が締めつけられる——大嫌いになった香り。

冷えきった琥珀色の瞳と視線が絡むが、藍は臆せず黙したまま毅然と睨みつける。  
重苦しい沈黙に耐えきれなくなったのか、彼は小さくため息をついた。

「……一緒の部屋にいるのも、いやですか？」  
傷ついたと言いたげな悲痛な顔を向けてくる。

暴虐なヤクザのくせに、なにを傷つくことがあるのか。被害者は、こちらなのに。

「ええ、ヤクザはいや」

「ヤスとは仲良く長話をしていたのに? ……ヤスが浮かれるほどに」

それは獣がぐるると唸っているかのような、低い声だった。

「彼は同じヤクザでも暴力的ではないし、比較的話しやすかっただけ。血塗れの『死の猟犬』さんとは違って」

そのふたつ名を口にした途端、瑛のまとう空気が剣呑さを強めた。

「……ヤスがお嬢に、その名を？」

「そ、そうだけど」

瑛の目にギンと殺気が走ったが、藍が怯えたことを察したのだろう、深呼吸をしてそれを消す。  
その異名は、よほど藍にはばれたくなかったらしい。……今さらなのに。

少しの沈黙を経て、瑛がゆっくりと言った。

「ねえ、お嬢。どんなにヤクザが嫌いでも、ヤクザらしくさえなければいいと言うのなら——」

端麗な顔を自嘲げに歪め、距離を詰めてくる。

みしり、みしりと畳が軋む。藍は身体を震わせて後退り……やがて後がなくなった。

「戻りましょうか? お嬢が恋した大学生の姿に」

口元は笑っているのに、その目は笑っていない。

そして、彼は言う。優しさの欠片などない、隣人の……一ノ瀬瑛の声音で。

「——藍、おいで?」

「馬鹿に……しないで!」

カッとした藍は怒鳴り、瑛の頬を平手打ちする。

「死の猟犬」相手だ。避けられるのを覚悟していたのに、呆気なく乾いた音が響き、藍は逆に驚いてしまった。

「お嬢。これしきのことだ。狼狽えてはだめです」

乱れた前髪から覗く琥珀色の瞳が獐犷な光を揺らめかせて、金色に光ったように見えた。

「狼狽えれば……噛みつかれますよ、『死の猟犬』に」

身体の芯が凍りつきそうなほど無感情なその目に、藍は狙われた小動物の如く身を竦ませた。

「男には隙を見せないでください。それが……女組長の威厳というものです」

どこまでも瑛は押しつけてくる。藍が嫌うヤクザの世界を。

「組長にはならない。帰らせて」

「食事をとってください。様子を見にきたら案の定、間違った箸の使い方をしている。そんな顔色ではあさつての襲名式にぶっ倒れてしまいますよ」

「帰らせて、お願いだから」

藍はその場で土下座した。だが落とされたのは、無情な言葉。

「それはできません。お嬢には組長になっていただきます。その準備はもうできています」

藍は畳に爪を立てて、瑛を睨みつけた。

「どうすれば帰してくれるの？　ここで裸になって、あなたに奉仕すればいい？」

藍の言葉に、瑛は眉間に皺を刻んで不快さを露わにすると、寒々しい琥珀色の瞳を向けてくる。

それは侮蔑や呆れにも似ていた。

「そんなもので、心が動く俺だとも？　甘く見ないでいただきたい」

ヤスは、お嬢という存在は溺愛対象と言ったけれど、瑛にとって自分は女ではないのだ。

彼が執着するのは、お飾りの次期組長が欲しいから。

三年間一緒にいた北村藍ではなく――

悔しさと悲しみに、藍はぼたぼたと涙をこぼす。

涙は見せたくなかったのに、もう無理だった。堪えきれない嗚咽に肩を震わせる。

こんな男、嫌いだ。

――スキ。

「お嬢……」

大嫌いだ。

――コノヒトガスキ……

……わかっている。どんなに拒絶しても、この冷たく非情な男をまだ好きだということは。

憎しみに変えて見ないふりをしていても、恋の残滓が胸の中で暴れ続けている。

だから、早く終止符を打ちたい。楽になりたい。

「あなたなんて大嫌い。わたしの世界から、消えてよ……！」

怒って牙を剥いて、噛み殺してほしい。

この苦しい恋心ごと、この世界から消し去ってほしい――

しかし藍の願いは虚しく、瑛は激昂することはなかった。

それどころか琥珀色の瞳に憂いを宿し、藍の前で跪いた。

「襲名式が終わったら、お嬢の望む通りにします。だから少しだけ……耐えてもらえませんか」

そう口にした瑛の顔は強張り、なにか思い詰めているようにも見えた。

「そんなに襲名式をしないとイケないの？　どんなにわたしがいやだと言っても、無理矢理に」

「……はい。なにがあるうとも、たとえお嬢が理不尽だと思われれることでも、それが組長の命令な

立ち読みサンプル  
はここまで

ら遂行する。それが草薙組若頭たる俺の仁義です」

そんなヤクザ事情など理解したくない。

だが——現実を受け入れろ、いい加減にもう。

自分が恋しい優しい隣人はもういない。

守ってくれるひとすらいのないのなら、自分ひとりで戦わねばならない。

「……だとしたらあなたは、組長以外の言葉は聞かないと言うのね？　そして組長の命令なら、どんなことでもする」と

「はい」

「わたしが組長になった後であれば、あなたはわたしの望み通りにしてくれるの？」

「はい、誓って」

——心は決まった。

それほどまで、組長にだけ従うと言うのなら、自分が取るべき手段はひとつしかない。

「わかったわ。襲名式におとなしく出る。食事もとるわ」

それを熱望していたくせに、瑛は驚きに目を丸くした。

「なにを驚くことがあるの、”死の猟犬”さん。疑うのなら、わたしがちゃんと食事を呑み込んでいるか、喉でも触って確認すれば？」

「……いえ。お嬢を信じます。今、温め直させますので、少しお待ちを」

瑛は膳を持って退室した。きちんと箸を取り上げることも忘れずに。

草薙組があくまで組長の命令に忠実で、襲名式以降、藍の望みが叶うというのなら。

「それを逆手に取って、起死回生のチャンスにしてやる！」

そのために、藍は体力をつけることにしたのだ。

※ ※ ※

襲名式当日——

藍用にと用意されていたのは、京友禅の着物だった。黒地に金銀赤の花々が咲き乱れ、アクセントとして藍色の流線模様が入っている。

着付けは瑛が担当した。紋付きの黒い羽織に濃灰色の袴姿はかまざたの瑛は、藍染めの着物姿以上に男らしさを強め、彼の美貌を際立たせていた。

瑛は藍の襦袢姿じゆばんざたを見ても表情ひとつ変えず、淡々と豪華な着物を着付けていく。

言葉交わすことなく、笑みすら見せ合わない。ただ肅々とした空気だけが部屋に漂ただよう。

金糸の刺繍ししゅうが施された帯を締め上げた後、瑛が後ろから藍の肩を掴つかむようにして、姿見越しから囁ささやいた。

「……お嬢、とても綺麗です」

琥珀色の瞳は柔らかく、その肌は上気して艶つやめいていた。

「ありがとう」